

昭和初期の番付と行司

根 間 弘 海

1. はじめに¹⁾

本稿では昭和初期の番付に限定し、主として、次のことを調べる²⁾。

- (1) 昭和2年春場所、行司界ではどのような変化があったか。
- (2) 昭和2年春場所、大阪相撲出身の行司は何名加わったか。
- (3) 木村玉之助と木村清之助はどのような処遇を受けたか。
- (4) 式守勘太夫、木村林之助、木村庄三郎の三役昇格はいつか。
- (5) 昭和初期の番付の各段はそれぞれ位階と一致するか。
- (6) 番付の各段がそれぞれ位階と一致するようになったのはいつか。
- (7) 昭和2年春場所から昭和29年秋場所までの番付で足袋以上の行司はどのように記載されているか。

行司の位階は房の色で表すので、位階が分かれば房の色も分かる。現在は番付を見れば、行司の位階はすぐ識別できる。同じ位階の行司は全員、まとめて一つの段に記載するからである。たとえ異なる位階が一つの段に記載されていても、位階の間には区切りがあるため、簡単に位階を識別できる。もちろん、同じ位階では席順に従って記載されるので、各行司の席順も簡単に識別できる。それでは、同じことが昭和2年春場所の番付でも当てはまるだろうか。もしそうでないとしたら、現在のような番付記載になったのは、いつからだろうか。そのような疑問を解決するために、昭和

2年春場所以降の番付を調べることにした。

昭和初期の番付を見ると、行司の位階や房の色は必ずしも分らない。同じ位階の行司が同じ段に記載されているとは限らないからである。異なる位階の行司が同じ段に記載されていることもあるし、同じ位階の行司が別々の段に分かれて記載されていることもある。しかも、異なる位階の間でそれを区別する明確な区切りがあるとは限らない。区切りがなければ、位階の区別は無理である。字のサイズも位階の区別に常に役立つ手掛かりとはならない。そうになると、行司の位階を知るには、番付以外の資料を参考にしなければならない。

昭和5年夏場所以降、行司の位階と房の色を記した資料がある。本稿ではそれを『行司名鑑』と呼ぶことにする³⁾。これに基づいた位階と房の色は本場所ごとに本稿の末尾に示してある。これを参考にすれば、少なくとも昭和5年夏場所以降の行司の位階と房の色は正確に識別できる。昭和2年春場所の番付も位階に関しては昭和5年夏場所とほとんど変わらないであろう⁴⁾。

2. 昭和2年春場所の番付

昭和2年春場所の位階に関し、「22代庄之助一代⁽¹⁰⁾」(『大相撲』, 昭和54年5月号, p.144)では、次のように述べている⁵⁾。

立行司：木村庄之助、式守伊之助、木村玉之助

三役格行司：木村清之助、(錦太夫改め)式守与太夫

幕内格行司：式守勘太夫、木村林之助、木村玉光、木村庄三郎、木村誠道、木村正直

このような位階にもかかわらず、番付ではその位階が必ずしも一致しない。昭和2年春場所の番付を見てみよう。

一段目：庄之助，伊之助，玉之助

二段目：清之助，（錦太夫改）与太夫，勘太夫／林之助，玉光

三段目：庄三郎，誠道，正直，要人，善之輔／光之助，政治郎

四段目：勝巳，作太郎，銀次郎，今朝三，友次郎／義，真之助，庄
吾，善太郎，喜市

斜線は位階を表す。つまり，一段目の行司は全員立行司である。二段目は清之助，与太夫，勘太夫の3名が三役格の緋房である。さらに二段目の林之助と玉光，それに三段目の庄三郎から善之輔までは，幕内格の紅白である。つまり，同じ幕内が二段目と三段目に分けて記載されている。三段目の光之助，政治郎，四段目の勝巳から友次郎までは十両格の青白房である。十両格も幕内格と同様に，二つの段に分けて記載されている。

位階に関しては，最上段はまったく問題ない。というのは，全員立行司だからである。それぞれの席順は配列の仕方だけでなく，字のサイズにも反映されている。しかし，三役格から十両格までは，同じ位階の行司が二段に分けて記載されている。そのことを知らなければ，同じ段の行司は全員，同じ位階だと誤解する恐れがある。しかも三役格と幕内格，幕内格と十両格を区別する明確な区切りがない。四段目では十両格と幕下格が記載されているが，位階を区別する明確な区切りがあるので，位階の識別を間違えることはない。

昭和2年の春場所の番付は，三角型である。すなわち，中央にその段の最高位を記し，それぞれの両脇にその段の行司を右，左というように，交互に配列する。この三角型では位階が異なる行司を一つの段に記載するとき，位階を区別する区切りを書きづらいという難点がある。字のサイズを変えることで区切りを表示することもあるが，それが必ずしも明確でない。そのため，同じ段に記載されている行司の段がなかなか識別できない。

昭和初期の番付を見ると，三角型の場合もあるし，平板型の場合もある。どのような基準で三角型になったり，平板型になったりするのかわから

ない。平板型は席順に右から左へ配列するので、位階の間で明確な区切りがあれば、位階の識別がものすごく分かりやすい。しかし、平板型であっても、その区切りがなければ、位階の識別は必ずしも容易でない。昭和初期にはときどき平板型の番付があるので、同じ段の位階を識別するのに役立つことがある。同じ位階の行司を2段に分けて記載してある場合は、区切りがないので、もちろん、位階の識別は難しくなる。

番付記載の方式に関して言えば、一段目から三段目までは三角型であっても、四段目以下では平板型になっていることが多い。さらに、青白房と黒房の場合は、同じ段で記載されていても、ほとんどの場合、その間に区切りがある。これは大きな特徴で、位階を明確に区別できる。しかし、青白房と紅白房、紅白房と朱房の場合は、位階を区別する区切りは必ずしも明確でないことがある。したがって、昭和初期の番付を見る際には、それぞれの段は必ずしも同じ位階ではないことに注意しなければならない。一段目を除いて、各段は一つの位階に必ずしも対応していないのである。したがって、二段目に記載されているからと言って、三役格で緋房と即断してはならない。同様に、三段目に記載されているからと言って、幕内格の紅白房と即断してもいけない。さらに、厄介なのは、同じ段でも二つの異なる位階が記載されていることである。

3. 格下げされた行司

両協会が合併した結果、行司数が増えたために、格下げされたものもある。大阪相撲の「紫房」立行司は、第三席の「紫白房」立行司に格下げされている。少なくとも十両格以上では、ほとんどの位階で格下げされていると言ってもよい⁶⁾。

「合体」のあおりか、とばかりか、行司のなかにはくらい一級ずつさげられて“うちわ”のひもの色、紫白房（大関格）が緋

(三役格)に、緋が緋白(幕内)に、緋白が青白(十両格)に、青白が青(幕下格)に変えられたものがあった。十両格なら足袋がはけるが幕下格になればはだしになる。(とくにこのとき十両格から幕下格へさげられた行司に土俵足袋をゆるした、これを格足袋ととなえた—などという説もある)裏面じゃあともかく表むき泣寝入るよりほかなかった。』(『大相撲太平記(21)』, p.40)

具体的には、たとえば、十両格から幕下格へ8名格下げされている⁷⁾。

「新番付で東西合同のために気の毒なのは行司の義、真之助、庄吾、善太郎、喜市、慶太郎、勝次、啓太郎の8名で、これまで十両格で足袋行司であったのが幕下格となり足袋を履けなくなった」(『都』(S2.1.8))

この記事によると、格下げされた幕下格は足袋を履けなくなっている。これを裏付けるものとして、次のような記事がある。

「大阪と合併して行司の頭数がふえ、改革された結果、足袋格で納まっていたのが、それぞれはだしとなって冷や飯草履となる。こぼすまいことか、まァいいや『給料は同じだから足袋代は儲かるぜ』とはき古しの砂を叩いてふところへ」(『東京日日』(S2.1.15))

三役格や幕内格の中では、誰が格下げされただろうか。大正15年5月場所の位階が明確でないで、それに関しては明確なことが言えない。庄三郎は自伝『軍配六十年』の中で大正14年春場所、三役格に昇進したと語っている⁸⁾。もしこれが真実であれば、庄三郎は昭和2年春場所、紅白房に格下げされたことになる。また、もし庄三郎が格下げされたなら、一枚上の林之助も紅白房へ格下げされているはずだ。というのは、一枚下の庄三郎が緋房だったなら、林之助も間違いなく緋房だったはずだからである⁹⁾。

この他にも何名か格下げされているかもしれない。残念ながら、大正15年5月、どの行司がどの房色だったかをまだ確定できないため、昭和2年

春場所、房色がどのように変化したのか、はっきりしない¹⁰⁾。たとえば、誠道、善之輔、要人、光之助、政治郎、勝巳、作太郎、銀次郎、今朝三等のうち、何名かは房色が変わった可能性がある。しかし、資料不足のため、はっきりしたことが分らない。

4. 大阪相撲の行司

両協会の合併で大阪相撲から参加した行司は足袋格以上が5名、幕下格以下が2名だったようだ。

- (a) 「行司の足袋格以上が5人加わっている」(『大阪毎日(夕刊)』／『東京日日』(S2.1.8))
- (b) 「合併時、大阪から加わった行司は、13代木村玉之助、木村清之助、木村玉光(のち16代玉之助)、木村正直(のち23代庄之助)、木村友次郎の面々だが、このほか、まだ幕下以下だった木村金吾(のち25代庄之助)も加わっている。」(「身内の証言—22代木村庄之助の巻き(2)」(『相撲』, p. 116))

幕下格以下では金吾の他に、滝夫(のちの木村校之助)も加わっている。これは、たとえば「22代庄之助一代記⁽¹⁰⁾」(『大相撲』, 昭和54年5月, p. 144)で確認できる。

大阪行司の足袋格以上5名のうち、ここでは3名について簡単に触れる。特に清之助の処遇が気になる。

(1) 木村玉之助

玉之助は庄之助、伊之助に次ぐ第三席の立行司として処遇されることが決まっており、審査の対象にはなっていない。ただし、軍配は紫白房に格下げされた。伊之助と同じ「紫白房」だが、白糸と紫糸の混ざり具合に違いがあった¹¹⁾。すなわち、第二席の伊之助は白糸が少しだけ混ざるのに対

し、玉之助は白糸と紫糸が半々混ざっている。これから分かるように、同じ立行司でも厳然とした区別があったことになる。

なお、合併する前の行司歴については、たとえば、「晴彦立行司出世—この場所より玉之助襲名」(『角力雑誌』、大正10年5月)にも見られる。

「(前略) 明治43年1月場所、土俵草履に昇格、朱総を許され、大正5年1月場所に木村晴彦と改め、(中略) 今回愈々立行司となり、玉之助を襲名したるものなる(後略)」(p.59)

ここでは、参考までに、土俵草履(朱房)を許された年月以降を引用したが、その記事にはそれ以前の昇進年月や改名等についても簡潔に述べてある。

(2) 木村清之助

大阪相撲の紫白房立行司木村清之助は三役格の緋房に格下げされている。三役格は草履を履けないので、草履も履けなくなった。清之助は昭和17年5月場所が最後だが、昭和2年春場所以降ずっと三役格のままだった。それが不思議だったが、本人が昇進を望んでいなかったようだ。

「仙骨木村清之助老は明治8年生まれという長老行司である。明治20年初土俵という長時代国宝級の老行司である。枯れ木の如き淡々たる土俵振りも国技館における異彩の一つである。老も大阪協会育ちで、既に大阪協会育ちで、既に大阪で紫白を許されていたが、両協会の合同に際して辞退して自ら緋房に格下がりをし、かつ先々代木村庄之助の死去以来、順送りに昇進して当然紫白房の立行司となるべき順序を、自分は老年ではあるし、至らぬことがあってはと後進に栄達の途を譲って、悠々大悟している大悟徹底振りは、またとない美しさである。」(『国技大相撲』、昭和16年6月、p.34)

これと同じような趣旨のことを22代木村庄之助も述べている¹²⁾。

「14年春に、15代目木村玉之助を襲名した。このときは順番から言えば清之助さんになるところだったが、『私はもう年もっているし、上はのぞまない。私は遠慮するからあんたが玉之助になってしっかりやってくれ』といわれ、私が襲名した。清之助さんは、声もよく、かなりうまい行司だったが、年がいきすぎているところから、三役格あたりで気楽にやりたいということで後進に道をひらいてくれたわけである。（『22代庄之助一代記⁽¹²⁾』『大相撲』、昭和54年9月、p.148）

上記の『国技大相撲』に合併の際、清之助は「紫白房を自ら辞退し、緋房に格下がりました」という記述があるが、これは真実でない。というのは、次のようなことが決まっていたからである。

「力士、行司は、横綱ならびに木村庄之助、式守伊之助（東京）、木村玉之助（大阪）の三立行司を除き、大関以下の全力士、全行司は、すべて無資格とし、実力、資格審査のうえ、新しく順位を決定すること」（『22代庄之助一代記⁽⁹⁾』（『大相撲』、昭和54年3月、p.148）

清之助は「紫白房」だったが、東京相撲の式守伊之助と同等とみなされていなかった。したがって、審査の対象となっていた。紫白房から緋房になったのは、清之助本人の希望ではなく、審査の結果、そのように判断されたのである。立行司として身分を保障することはなかったはずで、どの位階に配置するかを審査したはずである。吉田司家は第二回「連盟大相撲」（大正15年3月）のとき、わざわざ大阪まで来て審査をしている。もちろん、他の行司たちも同様に審査を受けている。

「行司の資格は吉田司家みずから大阪まで来て審査決定している。行司生活40年、紫白（立行司）の木村清之助は一けた下の緋ひも・足袋に格下げされた」（『大相撲太平記⁽¹⁹⁾』、p.44）

緋房に格下げされると同時に、草履を履けなくなっている。というの

は、昭和2年当時、三役格は草履を履けなかったからである¹³⁾。

なお、清之助は昭和2年春場所では三役格の最上位だったが、昭和3年春場所では一枚下がり、二枚目に降下している。さらに、昭和4年夏場所には三枚目に降下している。短期間のうちに、このように格下げされているのを見ると、清之助が何か大きな失策をしたのか、大阪相撲出身ということでは何か偏見があったのか、現在の感覚では分かりづらい何かがあったようである¹⁴⁾。

(3) 木村玉光

大阪相撲の木村玉光は幕内格の「紅白房」だが、二段目に記載されている。玉光は大阪相撲でも「幕内格」だったらしい¹⁵⁾。というのは、次のような記述がある。

「現玉之助（玉光→重政→玉二郎：NH）は旧大阪協会出身、明治30年5月初土俵、大正11年1月幕内行司となり、両協会合同となって上京、昭和10年緋房を許され、昭和15年5月玉之助を襲った」（『国技大相撲』、昭和16年5月号、p.34）¹⁶⁾

昭和2年春場所の番付では、二段目に記載されているので、一見すると、「三役格」のようだが、これは事実と反するのである。というのは、実際は幕内格だからである。

木村玉之助（前名：玉二郎）が三役格（緋房）になったのは、昭和10年夏場所後である。したがって、昭和2年春場所から昭和10年夏場所までずっと「幕内格」（紅白房）だったことになる。

5. 木村玉之助の名義

大阪相撲出身の行司は合併当初、不当に差別を受けていたらしい。そういう雰囲気があったようだ。大阪相撲出身の行司たちが相撲協会の上層部

に「質問書」を提出したというくらいだから、差別されていることを実感していたに違いない。しかし、この記事にあるように、実際に「質問書」が提出されたかどうかを裏付ける資料は他にない。

「大阪からきた行司連中はおそらく前途の不安をおぼえていたのであろう。協会の幹部に対して、将来玉之助（紫白）から伊之助・庄之助とさせてくれるかどうか、大阪からきた行司は永久に三枚目どまりかどうか—と『質問書』を出したが、さっぱり返答がない。（中略）なんでも大阪行司の玉之助・清之助がやめてしまったら、それかぎり、その名は消滅するとかしないとか。」（『大相撲太平記（22）』，p. 41）

これは「相撲界秘記」（『夏場所相撲号』，昭和2年5月号，p. 124）に基づいて書いたものである。この「相撲界秘記」にはさらに、次のような記述もある。

「何でも、大阪の行司の玉之助，清之助がやめてしまったら，それ限りで，その名はなくなる—なくなす意向のようです。木村正直あたりは，とにかく木村越後の子ですから，出世のできるだけ出世させてやるでしょうけれど，今の玉之助を，伊之助や庄之助にはしない。もし突然，庄之助なり伊之助なりに欠員ができたときには，与太夫を伊之助に，躍進させるつमりのようです。」（p. 124）

昭和2年当時は，大阪相撲の立行司玉之助が存命中は名義を残しておくが，玉之助が引退したら，その名義を廃止するという噂があったようだ。『行司名鑑』（昭和12年夏場所後）に「玉之助の名義を保存するため」という記述があることから，一時は廃止することが話し合われたかもしれない。しかし，この名義は第三席の立行司として昭和26年6月まで存続した。存続はしたが，新設された「副立行司」に格下げされている。

6. 三役格昇進の年月

番付では三役格の昇進が必ずしも明白でないが、大正末期に緋房を許されていたかもしれない3名の行司について簡単に見ていく。

(1) 式守勘太夫

勘太夫は、「22代庄之助一代記(9)」(p.147)によると、昭和2年夏に三役格になっている。そうすると、昭和2年春場所まで「幕内格」だったことになる。しかし、「三役格」になったのは、昭和2年春場所だったという文献もあるし、大正15年1月だったという文献もある。すなわち、三役格になった年月が三通りある。どれが本当だろうか。

勘太夫が三役格に昇格したのは昭和2年夏場所だったとする文献には、たとえば、『近世日本相撲史(2)』(p.9)や『大相撲』の「22代庄之助一代記(9)」(昭和54年3月号, p.147)／「22代庄之助一代記(10)」(『大相撲』昭和54年5月号, p.144)などがある。他方、自伝『ハッケヨイ人生』によると、三役格昇進は大正15年1月となっている。

「明治45年、すなわち大正元年に兵隊から帰ってきて、大正2年に十両格になりました。その十両も2年そこそこで、すぐ5年から幕内格になりました。幕内の軍配の房は紅白ですが、その紅白の房を持ったのは10年ほどではなかったかと思います。そして、大正15年1月に三役となり、勘太夫と名前もかわって朱房の軍配をもつことになりました。」(pp.76-7)

与之吉は大正15年1月、勘太夫に改名している。

「私は大正15年に三役行司式守勘太夫になるまでは、ずっと式守与之吉で通していました。」(p.70)¹⁷⁾

そして、勘太夫に改名したとき、紅白房から緋房（朱房）になっている。

「大正15年1月に三役になり、勘太夫と名前もかわって朱房の軍配を持つことになりました。」(pp. 76-7)

さらに、「相撲界秘記」(『夏場所相撲号』, 昭和2年5月)にも次のような記述がある。

「西の海の組合は、朱房の勘太夫が、特に地方だけの紫白行司になって—こうした例は、今の伊之助が錦太夫時代にありましたが—参加しますし、(後略)」(p. 123)

つまり、少なくとも夏場所以前に勘太夫は朱房を許されている。

(2) 木村林之助

木村林之助は元々大阪相撲の行司だが、合併前に東京相撲に加わっている。大正14年1月、二段目に幕内格（最下位）として付け出された。すなわち、紅白房（幕内格）として処遇されている¹⁸⁾。たとえば、『行司と呼出し』(p. 49), 「大相撲太平記(13)」(p. 43), 「22代庄之助一代記(9)」(p. 140)でもそれは確認できる¹⁹⁾。三役格昇進はいろいろな文献で確認できるが、その一つとして次の資料もある。

「昭和7年の春場所、泉の親方は三役に昇格した。」(「身内の証言—22代木村庄之助の巻き(2)」(『相撲』, p. 116)²⁰⁾

林之助は後に22代木村庄之助となるが、自伝『行司と呼出し』や雑誌の対談などで三役格になったのは、昭和7年2月だったと語っている。確かに、『行司名鑑』でも昭和7年2月以降に三役格に昇格している。これは事実に相違ないが、もしかすると、これは二度目の三役格昇進だった可能性がある。すなわち、大正15年春場所か夏場所に一度目の三役格に昇格した可能性があるのである²¹⁾。

番付では一枚下の庄三郎は大正15年春場所、三役格に昇格している。もしこれが真実であれば、林之助もその場所には三役格に昇格していたはず

である²²⁾。下位の行司が緋房を許されているのに、上位の行司がそれを許されないということは、行司の世界ではあり得ないからである。

林之助は雑誌の対談も多く、その行司歴もよく触れているのに、大正15年春場所と夏場所の経歴についてはまったく触れていない。もしいずれかの場所で三役格に昇進していたならば、たとえ昭和2年春場所、幕内格に降格したとしても、それについて何か触れていてもよさそうなものである。しかし、それがないのを見ると、もしかすると、紅白のままだったかもしれない。林之助が庄三郎と同じように、大正15年春場所か夏場所、三役格に昇格したというのは、間違った判断かもしれない。庄三郎や勘太夫（つまり21代木村庄之助）が大正15年春場所、三役格に昇進しているとすれば、林之助も当然、三役格に昇進したはずである²³⁾。

林之助は大正14年春場所、幕内格として付け出されたと語っているが、庄三郎について次のようにも述べている。

「私（林之助：NH）が幕内格のどんジリで、私のすぐ下が、十両最上位の木村玉治郎だった。のちのいわゆる“ヒゲの伊之助”である。（中略）このすぐあとの大正15年春、木村庄三郎を襲名して幕内格に上がり、昭和10年夏、三役格、26年秋19代目式守伊之助となった。」（「22代庄之助一代記（9）」『大相撲』、昭和54年3月、p.148）

この中で庄三郎は昭和14年春、十両最上位になっているが、これは林之助の勘違いによるミスである。というのは、庄三郎は自伝『軍配六十年』（p.157）に述べているように、大正4年夏、本足袋（すなわち幕内格）に昇進しているからである。それを裏付ける証拠は自伝『軍配六十年』の末尾に大正4年11月付の幕内行司免許状がある。その免許状にはっきり「団扇紐紅白色打交令免許畢…」と明記されている。庄三郎は大正2年1月、格足袋（つまり十両格）に昇進している²⁴⁾。これは、たとえば『読売』（T2.1.17）で確認できる。なぜ林之助が一枚下の庄三郎の地位を「十両格」

として記述しているのか、分らない。庄三郎が玉治郎から改名したのも大正15年「春」ではなく、「夏」である。「春」と「夏」の違いは単なる記憶違いによるものとみなしてもよいが、「幕内格」に昇格したというのは、やはりミスである。

庄三郎と林之助は昭和2年春場所、幕内格である。庄三郎は昭和10年5月場所後に三役格に昇格しているが、これは二度目の昇格ということになる。これに関しては、二通りの考えが成り立つ。

- (a) 庄三郎が大正15年春場所、緋房を許されたというのは勘違いによるものである。したがって、林之助は大正14年春場所から昭和7年春場所までずっと紅白房のままだった。
- (b) 庄三郎は大正15年春場所、緋房を許された。そうなると、林之助も大正15年春場所には緋房を許されていたはずだ。林之助が第一回目の三役格昇進について語らないのは、正式に認められていなかったからかも知れない。結果として、昭和2年春場所には幕内格として処遇されている²⁵⁾。

林之助は自ら大正15年の春場所か夏場所、三役格に昇格したとは語っていない。本稿で林之助が三役格に昇格したはずだと推測しているのは、一枚上の勘太夫や一枚下の庄三郎が大正15年春場所に三役格に昇格したと語っているからである。勘太夫や庄三郎が間違っているならば、林之助の昇格もあり得なかったことになる。そうなると、勘太夫が自伝『ハッケヨイ人生』で語っていることや庄三郎が「いはらぎ新聞」で語っていることも正しくないことになる。

(2) 木村庄三郎

庄三郎は大正14年春場所から昭和2年春場所まで、地位は林之助より一枚下であった。庄三郎は自身の行司歴について、「(19代)式守伊之助物語」『相撲』(1952)で次のように述べている。

「大正2年春には、格足袋を許されて、十両格に出世致し、昭和4年（大正4年：NH）の夏には、本足袋（幕内格）、14年春には、緋房（三役格）と、順を追ってすすみ、15年夏には、木村庄三郎を襲名しました。」（pp.11-2）

大正4年6月、本足袋（幕内）になったとき、取締・検査役に「御願」を提出しているが、その写しが「(19代) 式守伊之助物語」(『相撲』(1952), p.111)に掲載されている。それでは、三役格にはいつ、昇進したのだろうか。これに関しては、次に示すように、三通りある。

- (a) 大正14年春場所
- (b) 大正15年春場所
- (c) 昭和10年5月場所

昭和10年5月場所の昇格は二度目のものなので、まったく問題ない。問題は、大正14年春場所と大正15年春場所のうち、どれが正しいかということになる。自伝『軍配六十年』の「年譜」や相撲の雑誌記事によると、すべて大正14年春場所となっている。たとえば、「伊之助回顧録（3）—喜びと悲しみの六十年」（昭和33年2月号）には、次のように語っている。

「大富記者：まあ、本足袋から緋房になるまでというものは、なかなか年数が……

伊之助：そう、長い。私の場合でも10年くらいかかっているでしょう。

大富記者：9年ばかりですね²⁶⁾。緋房になったのが大正14年の1月場所ですから。

（中略）

大富記者：親方の結婚されたのはいつです。

伊之助：大正13年か14年だ。

大富記者：ほほう、緋房になったと一緒くらいですか。

伊之助：うん。」（p.205）

これによると、庄三郎は大正14年1月場所、緋房を許されている。結婚話などと結びつけて語られているので、年月に間違いはなさそうである。それにしても、一枚上の林之助の番付記載と合致しない。林之助は大正14年春場所、幕内格として付け出されているのに、一枚下の庄三郎は三役格に昇格したと語っている。庄三郎か林之助のどちらかが記憶違いしているにちがいない。長い間、判断で迷っていたが、庄三郎が記憶違いしていることが分かった。庄三郎本人が次のように語っているのである²⁷⁾。

「金吾から玉次郎になったのは大正2年の春です。ここで十兩格になったのでタビをはくことになりました。そして4年の夏に幕内格で本タビ、同15年春に三役格で緋房、その年の夏場所に庄三郎を襲名し、(中略)同22年の夏ぞうりをはけることになりました。」(『相撲』、山田著、p.197)²⁸⁾

これはつい最近、たまたま見つけた資料だが、この年月が真実に近いと判断している。その理由は次の三つである。

- (a) 『ハッケヨイ人生』(勘太夫、21代庄之助著)は大正15年1月に三役格に昇格したと語っている。また、庄三郎が大正14年春場所に昇格したなら、勘太夫はそれ以前に昇進していなければならぬ。
- (b) 林之助は大正14年春場所に幕内格として付け出されている。これは自伝や他の資料から間違いはない。一枚下の庄三郎は林之助より一枚下である。
- (c) 庄三郎が自伝『軍配六十年』や雑誌等で語っている年月は、勘違いによるミスである。行司本人が語っている昇格年月は必ずしも正しくない場合もある。

この解釈が正しければ、庄三郎は大正15年春場所、一回目の三役格昇格をしたことになる。昭和2年春場所、三役格から幕内格へ降下したが、昭和10年5月場所、二度目の三役格になった。

7. 昭和2年夏場所から昭和5年春場所まで

『行司名鑑』は昭和5年夏場所から始まっているが、昭和2年春場所からそれまでの間、行司の位階に大きな変化はない。昭和5年夏場所の位階と昭和2年春場所の位階は、基本的に同じだと言ってよい。違いがあるとするれば、式守勘太夫の三役格が昭和2年夏以降、明確になったことくらいである。それまでは、三役格に昇進した年月があいまいだった。すなわち、二通りの見方があった。一つは、大正15年春場所であった。もう一つは、昭和2年春場所だった。昭和2年初場所以降に関しては、異論がない。他に、変わったことをいくつか掲げておく。

- (a) 誠道は昭和2年夏場所が最後である。
- (b) 清之助の席順が二枚降下し、与太夫と勘太夫の次になっている。
- (c) 要人は昭和4年春場所、善三郎に改名した。
- (d) 玉光は昭和5年春、重政に改名した。

8. 幕下格と足袋

昭和2年春場所には十両格から幕下格へ格下げされた行司があったが、位階が下がったにもかかわらず、例外的に足袋を許されたという説がある²⁹⁾。それについて「大相撲太平記(21)」に次のような記述がある。

「十両格なら足袋をはけるが幕下格になればはだしになる。(とくにこのとき十両格から幕下格へさげられた行司に土俵足袋をゆるした、これを格足袋となえた一などという説もある)裏面じゃあともかく表むき泣寝入るよりほかはなかった。」(p. 40)

先に触れたように、『東京日日』(S2.1.15)では幕下格になった行司が足袋を履けなくなったとはっきり書いている。例外的に足袋を許そうとい

う話はあったかもしれないが、実際は実施されなかったと解釈するのが妥当であろう。そうでなければ、幕下格行司が足袋の埃を叩いて懐に入れるということはしないはずである。ただ理解できないのは、足袋を履けないにもかかわらず、それを本場所まで持ってきたことである。事前に分かっていたれば、素足で相撲場には入るはずである。その辺が気になるが、土俵上では足袋を履いて裁くということはなかったはずだ。

幕下格に足袋を例外的に許されたという説があったため、その延長で三役格も幕下格に下げられたが、元の緋房を例外的に許されたかもしれないと考えた。全員でないかもしれないが、一部には例外が認められたかもしれない。たとえば、林之助や庄三郎が大正末期に三役格の緋房に昇格していたなら、昭和2年春場所、幕内格に降下したが、元の緋房を例外的に許されたかもしれない。春場所は緋房を使用したか、夏場所からは紅白房に変わったかもしれない。位階と房の色は一致するのが、慣例だからである。しかし、そのようなことは、実際はなかったはずだ。

さらに、林之助にしても庄三郎にしても、昭和2年春場所だけ緋房が例外的に許されたという証拠が見当たらない。庄三郎は大正15年1月、三役格に昇格しているはずだが、林之助は昭和7年1月まで幕内の紅白だったと語っている。そうすると、林之助が昭和2年春場所、緋房を許されたという考えそのものが間違っていることになる。庄三郎は林之助より一枚下なので、緋房そのものを許されていないはずである。林之助と庄三郎が大正末期三役格の緋房を許され、昭和2年春場所幕内格に降下されたとしても、例外的に緋房を許されたというのは、おそらく、なかったであろう。

9. 昭和7年の春秋園事件

昭和7年1月、春秋園事件があり、行司の中にも何人か相撲協会を脱退している。その数は、せいぜい6人くらいだったようだ。

「この事件で行司で脱退していったのは、ずっと下の行司でしたが、いまの庄之助（当時式守伊三郎）、それから式守政治郎とかの幕内行司が二人と十枚目ぐらいのが一人、それに幕下が一人ぐらい、まあ五人そこそこでした。」（『ハッケヨイ人生』, p. 100）

行司名をはっきり述べている記事もある。

「行司では、式守政治郎、式守義（のちの24代庄之助）、木村勝次、式守豊之助らが脱退している。」（「22代庄之助一代記⁽¹¹⁾」『大相撲』, 昭和54年7月, p. 146）

『読売』（S7.2.2）によると、もう一人の幕下格行司は木村弥三郎（友綱部屋）である。「行司生活55年—24代木村庄之助」（『大相撲』, 昭和39年7月号, p. 48）によると、行司で脱退したのは全部で、6人である。そのうち、日本相撲協会に戻ったのは、どうやら一人だけだったらしい。

「あの事件で十両以上の関取衆は半分以上いなくなり、行司は上位のほうはあまり抜けませんでしたが、式守政治郎、式守義など、やっぱり5, 6人出ましたね。帰ってきたのは、のちに24代庄之助になった式守義改め伊三郎で、協会に復帰しました。」（「26代庄之助一代記(上)」『大相撲』, 昭和51年11月, p. 96）

10. 記載の段が変わった行司

昭和初期の番付では、場所によって同じ行司を記載する段が異なることがある。つまり、二段目に記載されていた行司が次の場所では最上段に記載され、そしてその次の場所では元の二段目に戻されることもある。また、逆に、二段目に記載されていた行司が次の場所では三段目に記載され、そして次の場所では元の二段目に戻されることもある。

たとえば、木村林之助と木村玉光は昭和6年夏場所、一旦三段目に格下げされ、その後再び二段目に格上げされている³⁰⁾。木村林之助は昭和7年

1月、三役格に昇格し、二段目に記載されている。木村玉光は昭和7年5月、二段目に格上げされているが、依然として幕内格の扱いのようである。というのは、昭和8年春場所番付でも二段目に記載されているが、木村林之助との間に明確な区切りがあり、位階が違うことを示しているからである。昭和8年夏場所番付では、「三役格」になっている。昭和6年5月場所から二段目から三段目に格下げされているので、それまで二段目に記載されていたことは、やはり「幕内格」だったと理解してよいであろう³¹⁾。

11. 位階の記載が確定した年月

『大相撲』(昭和54年)の「22代庄之助一代記(9)」(p.148)によると、木村庄三郎は昭和10年5月に三役格になっている³²⁾。実際は、5月場所後に昇格している。番付では、11年春場所となる。この11月場所を境にして、番付二段目は、基本的に、三役格が記載されるようになった。つまり、番付二段目を見れば、そこに記載されている行司が「三役格」である。それまでは、番付だけでは、「三役格」を見分けられないことになる。紅白房の行司も混在している可能性があるからである。それでは、最上段の行司はすべて、立行司なのかというと、これも必ずしもそうではない。たとえば、昭和22年夏場所の番付では、最上段に立行司の木村庄之助、木村玉之助の両脇行司として木村庄三郎と木村正直が記載されている。二段目に式守伊之助が記載されているので、木村庄三郎と木村正直が「立行司」でないことは分かる。草履を許可された三役格とそうでない行司を区別するために、そのような記載をしていると言ってよい。しかし、木村庄三郎と木村正直は翌場所、つまり昭和22年秋場所、式守伊之助は最上段に、三役格は全員、二段目に、それぞれ、記載されている。

このように、昭和2年1月場所から昭和20年代の番付を少し調べただけ

でも、三役格と幕内格の記載の仕方は一様でない。しかし、昭和11年春場所以降、基本的には、二段目は三役格、三段目は幕内格を記載している。三役格に草履を許可したり、副立行司を導入したりした場合は、それに応じて記載の仕方が変化しているが、基本的な記載方法は同じである。同じ段で異なる位階を記載する場合は、そのあいだに大きめの区切りを空けることが多い。

12. おわりに

昭和初期の番付は、これまで見てきたように、現在の番付記載方式をそのまま適用できない。番付で位階を知るには、番付だけでなく、他の知識も必要である。同じ段に異なる位階の行司が記載されていて、位階の間に明確な区切りがない場合があるからである。また、同じ位階の行司を二つの段に分け、別々に記載してあることもある。一つの位階に属する行司が二つの段に別々に記載されている場合、それが同じ位階の行司であることをどのように見分けられるか、はっきりしない。昭和初期の行司の位階と房の色は、本稿の末尾に提示してある資料で確認するとよい。

番付の各段と位階が一致するのは、昭和11年春場所である。同じ位階であれば、一つの段にまとめて配列してあるからである。異なる位階が一つの段に記載されている場合は、位階の間に明確な区切りがある。したがって、位階を区別できないということはない。しかし、昭和11年春場所以降でも、異なる位階の行司が同じ段に記載され、区切りがないこともある。そのような記載は、大体、次の場所で元の番付に戻っている。これは、同じ位階と房の色をできるだけ一致させようという考えが働いていることを示している。

木村勘太夫、木村林之助、木村庄三郎の3名がいつ、三役格に昇進したかについてはいくつかの説がある。本稿では、勘太夫と庄三郎は共に大正

15年1月、三役格に昇格したと解釈している。自伝『ハッケヨイ人生』（勘太夫、21代木村庄之助著）の年月は正しく、『軍配六十年』（庄三郎、19代式守伊之助）の年月は間違っていると解釈したが、この判断が正しいかどうかはもっと吟味しなければならない。『行司と呼出し』（林之助、22代木村庄之助著）には大正末期、緋房を許されたという記述さえない。実は、大正末期に木村勘太夫、木村林之助、木村庄三郎の3名に「緋房格」が許されたのかどうかさえも明確でないのである。これも今後、さらに、吟味する必要がある。

13. 参考文献

ここに記載した以外にも、新聞や雑誌『相撲』、『大相撲』、『野球界』（相撲特集号）、『角力新報』、『国技』、『角力雑誌』、『角力世界』、『武俠世界』等を参考にした。

木村庄之助（20代）、昭和17年、『国技勲進相撲』、言霊書房。

木村庄之助（21代）、昭和41年、『ハッケヨイ人生』、帝都日日新聞社。

木村庄之助（22代）、昭和32年、『行司と呼出し』、ベースボール・マガジン社。

木村庄之助（27代）、1994、『ハッケヨイ残った』、東京新聞出版局。

木村庄之助（29代）、2002、『一以貫之』、高知新聞社。

金指基、2002、『相撲大事典』、現代書館。

酒井忠正、昭和31年／39年、『日本相撲史（上・中）』、ベースボール・マガジン社。

式守伊之助（19代、高橋金太郎）、『軍配六十年』、高橋金太郎。

日本相撲協会博物館運営委員会（監）、昭和50年～56年、『近世日本相撲史』（第1巻～第5巻）、ベースボール・マガジン社。

藤島秀光、昭和16年、『近代力士生活物語』／『力時代の思い出』（昭和16年）、国民体力協会。

根間弘海、1998、『ここまで知って大相撲通』、グラフ社。

根間弘海、2006、『大相撲と歩んだ行司人生51年』、33代木村庄之助と共著、英宝社。

根間弘海、2007、『行司と草履』『専修経営学論集』第84号、pp. 185-218。

根間弘海, 2007, 「幕下格以下行司の階級色」『専修経営学論集』第84号, pp. 219-240.

根間弘海, 2007, 「立行司の階級色」『専修人文論集』第81号, pp. 67-97.

根間弘海, 2007, 「緋房と草履」『専修経営学論集』第85号, pp. 43-78.

根間弘海, 2008, 「明治43年以前の紫房は紫白だった」『専修経営学論集』第87号, pp. 77-126.

根間弘海, 2008, 「明治43年5月以降の紫と紫白」『専修人文論集』第83号, pp. 259-296.

山田野理夫, 昭和35年, 『相撲』, ダヴィッド社.

14. 資料(1): 昭和5年夏場所以降の番付と位階

一段目では, 基本的に, 「紫白房」か「紫房」の立行司が記載されている。立行司だけが記載されている場合は, 房の色も予測できるので, ここで省略してある。しかし, 異なる房の色が記載されたり, 番付の記載方式が異なっていたりした場合は, 一段目も提示してある。斜線は同じ段で異なる位階を表す。

(1) 5年夏場所

一段目: 「紫房」庄之助, 「紫白房」伊之助, 玉之助

二段目: 「緋房」与太夫, 勘太夫, 清之助 / 「紅白房」林之助, 重松

三段目: 「紅白房」庄三郎, 正直, 喜三郎, 善之輔 / 「青白房」政次郎, 光之助, 錦太夫

四段目: 「青白房」銀次郎, 今朝三, 友次郎, 伊三郎, 真之助 / 「黒房」庄吾…

(a) 一段目には立行司3名が記載されている。『行司名鑑』では3名とも「紫房」となっている。「紫白房」は記載されていない。つまり, 「紫房」と「紫白房」の区別はない。

(b) 一段目から三段目まで三角型だが, 四段目は平板型である。三角型の場合は, 原則として, 一段目から三段目までであり, それ以外は平板型である。

(a) 二段目と三段目では位階が異なる場合であっても, 位階の間で区切りがない。字のサイズは異なるが, それは位階というより席順を表しているようだ。

- (b) 四段目では青白房と黒房の間に区切りがある。青白房と黒房が同じ段に記載されるときは、原則として、位階の間に区切りがある。

(2) 6年春場所

二段目：「緋房」与太夫、勘太夫、清之助／「紅白房」林之助、重松

三段目：「紅白房」庄三郎、正直、喜三郎、善之輔／「青白房」政治郎、光之助、錦太夫

四段目：「青白房」今朝三、友次郎、伊三郎、真之助／「黒房」庄吾…

- (a) 一段目から三段目までは、5年夏と同じである。
 (b) 四段目も三角型になっていて、中央に青白房、その両脇に黒房が記載されている。

(3) 6年夏場所

一段目：「紫房」庄之助、「紫白房」伊之助

二段目：「紫白房」玉之助／「緋房」勘太夫、与太夫、清之助

三段目：「紅白房」林之助、重松、庄三郎、正直、喜三郎、善之輔、光之助

四段目：「青白房」政治郎、錦太夫、今朝三、友治郎、(伊三郎改)義、真之助／「黒房」庄吾…

- (a) 各段が平板型になっている。なぜこれまでの三角型を平板型に変えたのか、分らない。平板型はこの場所だけで、次の場所には三角型に戻っている。
 (b) 玉之助が二段目に降下している。その理由は分らない。玉之助は二段目に記載されているが、『行司名鑑』では庄之助、伊之助と共に「紫房」となっている。つまり、玉之助は一段目から二段目に下がって記載されているが、先場所と同様に、「立行司」であり、「紫白房」のままである。
 (c) 二段目では「紫白房」の玉之助が緋房三人と共に記載されているが、位階を区別する区切りはない。したがって位階を区別することはできない。
 (d) 三段目は全員、紅白房である。青白房は一人も記載されていない。
 (e) 四段目では青白房と黒房の間に区切りがある。右側が紅白房、左側が青白房である。
 (f) 平板型では席順で並列されるので、席順が明確である。

(4) 7年春場所(2月)³³⁾

二段目：「緋房」与太夫、勘太夫、清之助、林之助

三段目：「紅白房」重松、庄三郎、正直、喜三郎、善之輔、光之助、錦太夫

四段目：「青白房」今朝三、友治郎、真之助、善太郎／「黒房」庄吾…

- (a) 錦太夫は「関西場所にて承認。2月場所より紅白昇進す」『行司名鑑』とある。

- (b) 林之助は「関西場所にて承認。2月場所緋房に昇進」『行司名鑑』とある。
- (c) 庄吾と哲雄は「革新団脱退す」『行司名鑑』とある。しかし、番付では7年夏場所にもまだ載っている。
- (d) 哲雄は「2月場所後、青白へ昇進承認さる」『行司名鑑』ともある。
- (e) 政治郎は「昭和7年11月5日、紛擾より振興団へ脱退す」『行司名鑑』とある。これは後で追加記入したものであろう。
- (f) 昭和6年夏場所と同じように、平板型である。
- (g) 玉之助は元の一段目に記載されている。先場所では二段目に記載してあったので、記載する段を変えるにはやはり理由があったに違いない。「黒星」が原因でなければ、「玉之助」の処遇を巡る論議があったかもしれない。

(5) 7年夏場所

二段目：「緋房」与太夫、勘太夫、清之助、林之助／「紅白房」重松

三段目：「紅白房」庄三郎、正直、喜三郎、善之輔、光之助、錦太夫／「青白房」今朝三

四段目：「青白房」友治郎、真之助、善太郎、哲夫／「黒房」栄吉…

- (a) 一段目の伊之助は「関西本場所京都にて庄之助襲名推薦す」『行司名鑑』とある。
- (b) 二段目の与太夫は「関西本場所京都にて伊之助襲名推薦さる」『行司名鑑』とある。
- (c) 一段目から四段目までは三角型である。四段目も三角型になっているのが従来と変わっている。
- (d) 二段目では、従来と違って、緋房と紅白房の間で区切りがある。左端の重政は紅白房である。
- (e) 三段目の今朝三は青白房だが、紅白房との間で位階を区別するほどの区切りはない。見たところ、錦太夫と今朝三はほとんど同じサイズである。
- (f) 四段目では青白房四人が中央に、その両脇に黒房が記載されているが、位階を区別するほど明確な区切りはない。

(6) 8年春場所

二段目：「緋房」勘太夫、清之助、林之助／「紅白房」重松、庄三郎、正直

三段目：「紅白房」喜三郎、善之輔、光之助、錦太夫／「青白房」今朝三、庄三郎、真之助

四段目：「青白房」哲夫／「黒房」与之吉…

- (a) 友次郎は「夏場所後紅白に昇進する」『行司名鑑』とある。

- (b) 平板型に変わっている。先場所の三角型と見比べれば、席順が明確に判断できる。
- (c) 二段目では緋房と青白房の間に区切りがある。
- (d) 三段目では紅白房と青白房の間に区切りがある。
- (e) 四段目では青白房と黒房の間に区切りがあるが、青白房は哲夫一人だけである。

(7) 8年夏場所

二段目：「緋房」勘太夫、清之助、林之助／「紅白房」(重松改)玉二郎、庄三郎

三段目：「紅白房」正直、喜三郎、善之輔、光之助、錦太夫、今朝三

四段目：「青白房」友次郎、真之助、善太郎、哲雄、与之吉／「黒房」百合夫…

- (a) 一段目から三段目まで三角型だが、四段目は平板型である。
- (b) 二段目目は中央に緋房三人、その両脇に紅白房一人ずつが記載されている。
- (c) 三段目は全員紅白房である。
- (d) 四段目では青白房と黒房との間に区切りがある。

(8) 9年春場所

二段目：「緋房」勘太夫、清之助、林之助／「紅白房」玉二郎、庄三郎

三段目：「紅白房」正直、喜三郎、善之輔、光之助、錦太夫、今朝三

四段目：「青白房」友次郎、真之助、善太郎、哲雄、与之吉／「黒房」百合夫…

- (a) 記載方式は8年夏場所と同じ。
- (b) 重政が玉二郎に改名した。

(9) 9年夏場所

二段目：「緋房」勘太夫、清之助、林之助／「紅白房」玉二郎、庄三郎

三段目：「紅白房」正直、喜三郎、善之輔、光之助、錦太夫、今朝三

四段目：「青白房」友治郎、真之助、善太郎、哲雄、与之吉／「黒房」百合夫…

- (a) 『行司名鑑』で、始めて、立行司の項に「紫白房」を記入し、「紫房」と区別する。それまでは「紫房」だけを記入していた。
- (b) 記載方式は8年夏場所と同じ。

(10) 10年春場所

二段目：「緋房」勘太夫、清之助、林之助／「紅白房」玉二郎、庄三郎

三段目：「紅白房」正直、喜三郎、善之輔、光之助、錦太夫、今朝三

四段目：「青白房」友次郎、真之助、善太郎、哲雄、与之吉／「黒房」百合夫…

- (a) 記載方式は8年夏場所と同じ。
- (b) 友治郎が友次郎に改名している。

(11) 10年夏場所

二段目：「緋房」勘太夫、清之助、林之助／「紅白房」玉二郎、庄三郎

三段目：「紅白房」正直、喜三郎、善之輔、光之助、錦太夫、今朝三

四段目：「青白房」友治郎、真之助、善太郎、哲雄、与之吉／「黒房」百合夫…

- (a) 一段目の庄之助は「5月場所後協会より木村松翁の号を推薦せらる」『行司名鑑』とある。
- (b) 玉二郎は「5月場所後緋房昇進承認」『行司名鑑』とある。
- (c) 庄三郎は「5月場所後緋房昇進承認」『行司名鑑』とある。
- (d) 友治郎は「5月場所後紅白へ昇進承認」『行司名鑑』とある。『大相撲春場所』（昭和16年1月号、p.65）に友治郎は昭和10年5月に紅白房に昇格したとある。5月場所後に昇格が決まったので、番付記載は翌場所からとなる。
- (e) 記載方式は8年夏場所と同じ。

(12) 11年春場所

二段目：「緋房」勘太夫、清之助、（林之助改）容堂、玉二郎、庄三郎

三段目：「紅白房」正直、喜三郎、善之輔、光之助、錦太夫、今朝三、友治郎

四段目：「青白房」善太郎、真之助、哲雄、与之吉、百合夫／「黒房」金吾…

- (a) 一段目では「松翁木村庄之助」と記載されている。
- (b) 記載方式は8年夏場所と同じ。
- (c) 一段目から三段目まで、この場所から各段に記載された行司がすべて、房の色が同じである。すなわち、同じ位階が記載されている。二段目は全員、緋房であり、三段目は全員、紅白房である。
- (d) 四段目の場合、青白房と黒房が記載されているが、位階の区別をする区切りがある。四段目では、これは特に珍しい書き方ではない。

(13) 11年夏場所

二段目：「緋房」勘太夫、清之助、容堂、玉二郎、庄三郎

三段目：「紅白房」（喜三郎改）与太夫、正直、光之助、善之輔、今朝三、錦太夫、友治郎

四段目：「青白房」（真之助改）錦之助、善太郎、哲雄、与之吉、百合夫／「黒房」金吾…

- (a) 記載方式は11年春場所と同じ。
- (b) 四段目で善太郎と哲雄の間に区切りがある。その理由は分からない。次の場所でその区切りがなくなっているので、この区切りは位階の違いを表すものではないようだ。
- (c) 善太郎と錦之助の席順が入れ替わっている。その理由は分からない。

(14) 12年春場所

二段目：「緋房」勘太夫、清之助、容堂、玉二郎、庄三郎

三段目：「紅白房」正直、与太夫、善之輔、光之助、錦太夫、今朝三、友治郎

四段目：「青白房」錦之助、善太郎、哲雄、与之吉、百合男／「黒房」金吾…

- (a) 正直は「1月場所後緋房に昇進す」『行司名鑑』とある。
- (b) 錦之助は「1月場所後紅白に昇進す」『行司名鑑』とある。
- (c) 記載方式は11年春場所と同じ。
- (d) 四段目の善太郎と哲雄との間で区切りがなくなっている。このことから四段目の右側は全員青白房である。

(15) 12年夏場所

二段目：「緋房」勘太夫、清之助、容堂、玉二郎、庄三郎

三段目：「緋房」正直「紅白房」与太夫、善之輔、光之助、錦太夫、今朝三、友治郎

四段目：「青白房」錦之助、善太郎、哲雄、与之吉、百合男／「黒房」（金吾改）玉光…

- (a) 一段目の玉之助は「5月本場所後引退。年寄岩友襲名す」『行司名鑑』とある。
- (b) 勘太夫は「5月場所後協会推薦により三代行司として玉之助名義保存により14代目木村玉之助襲名す」『行司名鑑』とある。
- (c) 記載方式は11年春場所と同じ。
- (d) 正直は三段目中央に大きな字で記載されている。『行司名鑑』にも「緋房」となっている。春場所後に「緋房」に昇進している。しかし、なぜ二段目に紅白房行司と共に記載されているかは分からない。一段目の下位行司を二段目中央に記載する方式は以前にあったが、これは二段目の下位行司を三段目の中央に配置している。珍しいケースである。
- (e) 「新庄之助によせて」（『相撲』、昭和35年2月）によると、やはり昭和12年春場所後に三役格（緋房）を許されている。

「大正13年5月には紅白房幕内格となり、合併後の昭和12年春場所打ち上げ後に、朱房三役格、昭和22年6月明治神宮奉納相撲にはヒゲの伊之助と共に、格草履を許され、さらに昭和26年夏場所後、千代の山の横綱と同時に、これまた伊之助と並んで紫白房、帯刀、副立行司を協会認証（それまでは横綱、立行司も協会の推せんによって吉田家が免許していた）のもとに司家から免許された。」
(p. 97)

- (f) 「土俵一途の55年」（『大相撲』、昭和38年1月、p. 47）によると、正直本人は昭和13年に三役格になったと語っている。これはどう解釈すれば

よいだろうか。少なくとも二通り考えられる。一つは、『行司名鑑』が違っている。もう一つは、正直自身の記憶違いである。『行司名鑑』は間違っていないはずだ。というのは、『相撲』（昭和35年2月号、p.97）でも昭和11年春場所後に三役格に昇格したと述べている。昭和12年夏場所の番付では字の大きさが他の紅白房行司も一際目立っている。おそらく、正直自身は年月を勘違いし、昭和13年と語ったに違いない。それにしても、三役格を一人だけ三段目に記載してあるのは確かに気になる。本稿では、『行司名鑑』にあるように、昭和12年春場所後に昇格したと判断しているが、本人は昭和13年春場所に昇格したと語っていることも指摘しておきたい。

(16) 13年春場所

二段目：「緋房」清之助、容堂、玉二郎、庄三郎、正直

三段目：「紅白房」与太夫、善之輔、光之助、錦太夫、今朝三、友治郎、錦之助

四段目：「青白房」善太郎、哲雄、（与之吉改）勘太夫、百合男、玉光／「黒房」善吉…

- (a) 勘太夫が立行司木村玉之助へ昇進している。
- (b) 伊三郎は昭和13年1月、新興力士団より東京相撲に復帰したが、幕下（四段目）の末席に付け出された。これに関しては、本人が次のように語っている。

「私は13年1月に帰参したのだが、とにかく一度脱退したのだから、すぐに十両格というわけにはいかない。一応、格下げて幕下4枚目式守伊三郎で付け出しである。翌14年1月に再十両に昇格した。」（『行司生活55年—24代木村庄之助』『大相撲』昭和39年7月、p.48）

- (c) 記載方式は11年春場所と同じ。
- (d) 正直が二段目に記載されたため、各段が房の色と一致している。すなわち、二段目は全員緋房、三段目は全員紅白房である。
- (e) 四段目は青白房と黒房がそれぞれまとまって記載されている。

(17) 13年夏場所

二段目：「緋房」清之助、容堂、玉二郎、庄三郎、正直

三段目：「紅白房」与太夫、善之輔、光之助、錦太夫、今朝三、友治郎、錦之助

四段目：「青白房」善太郎、哲雄、勘太夫、百合男、玉光／「黒房」善吉…

- (a) 記載方式は11年春場所と同じ。
- (b) 各段と房の色は一致する。
- (c) 四段目では青白房と黒房との間で区切りがある。

(18) 14年春場所

一段目：「紫房」松翁木村庄之助，「紫白房」（玉之助改）伊之助，（容堂改）玉之助

二段目：「緋房」清之助，玉二郎，庄三郎，正直，与太夫

三段目：「紅白房」善之輔，今朝三，友治郎，錦之助，善之助

四段目：「青白房」勘太夫，玉光，善吉，与之吉，庄次郎，伊三郎／「黒房」良雄…

- (a) 庄之助は「松翁」となる。番付では「松翁木村庄之助」として記載されている。
- (b) 容堂は木村玉之助に昇格し，一段目に記載される。
- (c) 伊三郎は幕下末席から，青白房の末席に昇進した。
- (d) 記載方式は11年春場所と同じ。
- (e) 順番からすれば，清之助が玉之助へ昇進してもよさそうだが，本人が辞退している。

(19) 14年夏場所

二段目：「緋房」清之助，玉二郎，庄三郎，正直，与太夫

三段目：「紅白房」善之輔，今朝三，友治郎，錦之助，善太郎

四段目：「青白房」勘太夫，玉光，善吉，与之吉，庄治郎，伊三郎／「黒房」良雄…

- (a) 記載方式は11年春場所と同じ。

(20) 15年春場所

一段目：「紫房」（伊之助改）庄之助，「紫白房」（玉之助改）伊之助，（玉二郎改）玉之助

二段目：「緋房」清之助，玉二郎，庄三郎，正直，与太夫

三段目：「紅白房」善之輔，今朝三，友治郎，錦之助，善太郎

四段目：「青白房」勘太夫，玉光，善吉，与之吉，庄治郎，伊三郎／「黒房」良雄…

- (a) 記載方式は11年春場所と同じ。
- (b) 前場所と同じ。

(21) 15年夏場所

二段目：「緋房」清之助，庄三郎，正直，与太夫，善之輔

三段目：「紅白房」今朝三，友治郎，錦之助，善太郎，勘太夫

四段目：「青白房」玉光，善吉，与之吉，庄治郎，伊三郎，良夫／「黒房」滝夫…

- (a) 伊之助が21代木村庄之助を襲名した。

- (b) 玉之助が伊之助を襲名した。
- (c) 玉二郎が玉之助を襲名した。
- (d) 記載方式は11年春場所と同じ。

15. 資料(2)：昭和16年以降の番付

16年春場所以降で、留意したほうがよさそうな点を列記しておく。

- (1) 昭和17年春
 - (a) 三段目に紅白房と青白房が共に記載されている。位階の間には区切りがある。
- (2) 昭和19年春
 - (a) 三段目は緋房、三段目は紅白房だけである。
 - (b) 四段目は青白房と黒房である。
- (3) 昭和22年夏
 - 一段目：「紫房」庄之助，「紫白房」玉之助／「緋房」庄三郎，正直
 - 二段目：「紫白房」伊之助／「緋房」与太夫，庄太郎，今朝三，伊三郎
 - 三段目：紅白房と青白房が平板型で記載されている。
 - (a) 庄三郎と正直が格草履となる。一段目に記載されているが，房の色は緋房のままである。この段を見るだけでは，一段目では紫房，紫白房，緋房が記載されている。番付ではその色は見分けられない。特に，庄三郎と正直が緋房かどうかは，まったく分からない。
 - (b) 二段目では「紫白房」の伊之助が中央に，その両脇に緋房が記載されているが，番付では房の色を見分けることはできない。
- (4) 昭和22年秋
 - (a) 格草履の庄三郎と正直が二段中に記載されている。これから22年夏場所も緋房だったことが分かる。
- (5) 昭和26年夏
 - 一段目：「紫房」庄之助，「紫白房」伊之助／「紫白房」玉之助，庄三郎
 - 二段目：「緋房」全員
 - 三段目：「紅白房」全員
 - (a) 『行司名鑑』では「玉之助，庄三郎両氏同格，副立行司の名称となる」

とある。つまり、玉之助は「立行司」から「副立行司」に格下げされ、庄三郎は「格草履」から「副立行司」に格上げされた。房の色は二人とも「紫白房」で、草履を履けた。

(6) 昭和26年秋

一段目：「紫房」（伊之助改）庄之助，「紫白房」（庄三郎改）伊之助，「紫白房」

玉之助，正直

二段目：「緋房」全員

三段目：「紅白房」全員

(a) 正直は「木村玉之助と同格，土俵は交互上下交代にやること」『行司名鑑』とある。

(b) 玉之助は「土俵は交互上下交代にやること」『行司名鑑』とある。

(c) 正直と玉之助は副立行司である。

(7) 昭和27年春場所から昭和29年秋場所まで

(a) 26年秋と同じ。

注

1) 本稿をまとめる際、3名の木村庄之助（29代，33代，35代）にお世話になった。電話で話したり，直接お会いしたりして，御教示をいただいた。ここに改めて，感謝の意を表する。なお，本稿の末尾には資料として番付と位階の関係を具体的に扱っている。

2) 大正期と明治期の番付に関しては，本稿ではほとんど触れない。これに関しては，拙稿「大正時代の番付と軍配房の色」，「明治30年以降の番付と軍配房の色」としてまとめている。近いうちに発表する予定である。

3) この資料は未公刊で，しかも手書きなので，残念ながら，その所在を公表するのは躊躇せざるを得ない。末尾に提示してある内容を見れば，その信頼度はまったく申し分のないものである。行司に関連することを研究している者として，このような資料を直接見ることができたのは本当に幸せだ。ここに感謝の意を表しておきたい。

4) 昭和5年夏場所と昭和2年春場所では，辞めた行司もいるし，昇格した行司もいる。しかし，大きな変動はない。辞めた行司の中では，誠道の位階が気になる。幕内格で辞めているが，大正15年5月，どの位階であったかがはっきりしない。つまり，大正15年5月も幕内格だったのか，それとも三役格に昇格したが，昭和2年春場所幕内格に降格したのかはっきりしない。たとえ三役格に昇格したとしても，吉田司家の免許はまだ下りていなかった可能性がある。

- 5) 式守勘太夫がいつ三役格になったかに関しては二通りの説がある。自伝『ハッケヨイ人生』(p.70, pp.76-77)によると、大正15年1月である。他方、『近世日本相撲史(2)』(p.9)と『大相撲』昭和54年5月号, p.144)によると、昭和2年5月である。本稿では、自伝にあるように、勘太夫は大正15年1月、すでに「三役格」だったと解釈している。しかし、ここでは、林之助の分類に基づいて記述してある。
- 6) 十両格が幕下格へ格下げされていることから、おそらく幕下格以下でも格下げがあったはずだ。しかし、本稿では、幕下格以下の行司についてはまったく触れていない。
- 7) 十両格行司のうち、この8名だけが足袋を履けなくなったのか、はっきりしない。大正15年5月、どの行司が十両格で、どの行司が幕下格なのか、まだ確認できないため、十両格全員が幕下格に格下げされたのかどうか分からない。
- 8) 庄三郎は自伝『軍配六十年』では大正14年春場所、三役格に昇格したと述べているが、本稿では、後で触れるように、三役格になったのは大正15年春場所だと解釈している。当面は、自伝で語っている年月を採用している。
- 9) 庄三郎と林之助の「三役格」昇進については、後ほど詳しく扱う。
- 10) 大正時代も、昭和初期の場合と同様に、番付だけでは房の色を識別できない。つまり、番付の各段と房の色は必ずしも対応していない。なお、木村鶴之助は昭和2年春場所前に退職しているので、その春場所の番付には記載されていない。
- 11) 木村玉之助と式守伊之助の「紫白房」については、『力士時代の思い出』(藤島著, p.87)にも言及されている。拙稿「緋房と草履」(2007)、「立行司の階級色」(2007)、「明治43年5月以降の紫と紫白」(2008)などでも触れている。なお、『大相撲夏場所』の「土俵を見つめて」(昭和15年5月号, p.46)によると、15代式守伊之助(のちの松翁20代木村庄之助)も紫系と白系が半々の軍配を用いている。しかし、これは縁起担ぎのために、自分で軍配製作者に依頼したもので、木村玉之助の場合とは異なる。昭和2年春場所以前は、紫系と白系の割合は決まっていなかったらしい。
- 12) 『相撲と野球』(昭和18年1月号)の「故木村清之助のことなど」(p.44)でも「現役行司の最長老であり立行司として木村庄之助を継ぐべきを、自分は老齢にしてその任にあらずと常に辞退し、緋総の行司として後進の指導に当たっていた」と記されている。
- 13) 三役格がいつから草履を履けなくなったかは、分からない。立行司に次ぐ準立行司が「三役格」だったころは草履を履けたが、その準立行司がいつ正式に廃止されたのかははっきりしない。草履を許された三役格とそうでない三役格を廃止した明確な時期があったのかどうかさえはっきりしないのである。

- 14) 大阪から東京へ移った当初から上の位階に昇格することを本人が辞退していたかどうかははっきりしない。実際、大阪出身の行司の査定や清之助の降下に関しては同情すべきこともあったらしい。それについては、たとえば、「相撲界秘記」(『夏場所相撲号』, 昭和2年5月, pp. 122-4) や「角界秘密暴露記」(『夏場所相撲号』, 昭和3年5月号, p. 119) にも述べてある。「大相撲太平記(22)」(p. 41) にも同じ趣旨の内容があるが、これは「相撲界秘記」や「角界秘密暴露記」を参考にしてある。
- 15) 昭和2年春場所では幕内格、つまり紅白房である。大正15年の行司審査のとき、実際の「幕内格」だったかどうかに関しては、まだ資料で確認していない。大正末期に三役格に昇進していたなら、昭和2年春場所番付では一枚格下げされたことになるが、三役格から幕下格へ格下げされたということを述べてある資料は見ることがない。
- 16) 玉光(のち重松)は昭和10年5月場所後、緋房に昇進している。昭和8年夏場所、重松から玉二郎に改名し、のち13代玉之助となった。
- 17) これは、『都』(大正15年1月6日)でも確認できる。
- 18) これに関しては、たとえば、「大相撲太平記⁽¹³⁾」でも本人自らが認めている。
- 19) 林之助は「大正13年夏場所」に幕内ドン尻に付け出されたと書いてある文献もあるが、それは本人が後で修正しているように、「大正14年春場所」の間違いである。たとえば、「大相撲太平記⁽¹³⁾」(p. 43)でも「大正13年夏場所」とあるが、これはもちろん、勘違いによるミスである。なお、林之助を「三役格」に付け出すとの噂があったらしいが、それについて「大相撲太平記⁽¹³⁾」(p. 43)にも少し言及されている。結局、幕内格として付け出されている。
- 20) これは、後藤氏(28代木村庄之助)の証言である。
- 21) その時期は、おそらく、大正15年春場所だと推測している。というのは、庄三郎も大正15年春場所に三役格に昇格したはずだからである。もし庄三郎が大正14年春場所、三役格に昇格したならば、一枚上の林之助も同じ年月に昇格したはずだ。しかし、すぐ後で触れるように、その可能性は非常に少ない。
- 22) 木村庄三郎は大正15年1月、木村玉治郎から改名しているが、説明の便宜上、木村庄三郎を使う。
- 23) 庄三郎と勘太夫の三役格昇進は協会が認め、本人に通知したが、昭和2年春場所まで吉田司家の免許が下りなかったかもしれない。そのため、三役格昇格は非公式扱いとなり、昭和2年春場所には結果として幕内格に降格されたかもしれない。
- 24) 庄三郎は十両時代、金吾と名乗っていた。
- 25) 大正15年春場所の三役格昇格は協会だけの許可だった可能性がある。吉田司家

- から三役格の許しがあったなら、それを対談などでも語っているはずだ。これを裏付ける資料を見つけようと努めているが、今のところ、まだ見つけていない。
- 26) 庄三郎は大正4年(玉治郎のころ)、紅白房を許されているので、伊之助が語っているように、実際は約10年かかっている。
- 27) 庄三郎が大正15年春場所、三役格に昇格したとする資料はこれしか見たことがない。他の資料では「大正14年春場所に三役格昇格した」となっている。それをただす意味でも、この資料は貴重である。
- 28) これは行司定年制が実施されたころ、『いはらぎ』新聞に掲載された対談記事を抄録したものである。
- 29) 幕下格は昭和以前でも足袋をはくことはできない。それができるのは、十両格以上である。これは現在でも変わらない。
- 30) 木村玉光は昭和5年1月、木村重政と改名している。
- 31) 二段目から三段目に格下げされる理由としては他に、黒星数の影響も考えられるが、それはおそらく原因ではないであろう。というのは、木村林之助と木村玉光二人が同時に格下げされているからである。
- 32) これは二度目の「三役格」昇進である。一度目は、大正15年1月である。昭和2年1月、三役格から幕内格に格下げされている。昭和10年5月が正確な年月なのかどうかは、必ずしもはっきりしない。それより以前だという文献もある。昭和10年5月、三役格に昇進したとしても、番付ではそれを明確に確認できない。というのは、記載に関する限り、それ以前の番付と何の変化もないからである。
- 33) 春場所は1月にも番付が発表されたが、『行司名鑑』にこの1月場所の記録はない。